新しい中国語教育についての実践と提案

—— ビデオ教材の利用と音声入力の可能性 ——

横　山　　裕、有　馬　卓　也

A Proposal and Practice on New Instruction of Chinese Language.

Yutaka YOKOYAMA, Takuya ARIMA

<概　　要>

近年急速に進められている大学改革の一環として語学教育のあり方も社会及び学生のニーズに応じてコミュニケーション能力の収得を重視する方向で見直さなければならない。そこで有馬は現状で可能なビデオ教材を使用した語学教育を実践しその学習効果と問題点を明らかにし、横山は近い将来教育の現場に広く導入されるであろうコンピューターを利用した語学教育の可能性を明らかにした。

キーワード：中国語教育、学生のニーズ、ビデオ教材、コミュニケーション能力、CAI、音声入力。

1。はじめに

日本の大学における標準的な語学教育は、あたかも欧米諸国で行われていたラテン語教育に似ている。即ち、文法と語彙を教授し、文献講読を授業目的とするスタイルである。したがって、教授法は語彙及び文法に関する諸規則を学生に説明した後暗記させ、教師が選んだ文献をひたすら読み進むという具合になる。しかしながら、ラテン語教育がラテン語という死語（日常は話されない言語）であり、ラテン語習得の目的が古典講読であったり或いは知識としての教養を身につけることであったのに対して、日本の大学における語学教育の対象言語は、英語、仏語、独語、中国語いずれにせよ現在多くの人によって使用

されている言語であり、学生が期待する語学習得の目的は、文献講読もさることながら習得した外国語によってその外国語を母国語とする人とコミュニケーションができることにある。高校の語学の授業が（大多数は英語であるが）実際問題として入学試験を意識した知識偏重にならざるを得ないのは現状では納得できる。しかしながら、入学試験という制約のない大学教育においてまで、高校の延長の如き語学教育を行う必要性はないと思われるが、社会人を或いはダブルスクールの学生を対象とした市井の語学学校が今日のような盛況ぶりであるのは、大学の語学教育が学生のニーズに合致する教育をしていないことの証明であるように思われる。折しも、近年就学適齢人口の減少によって大学改革が進行している。それに伴い学部改組・教養部廃止等のニュースを耳にすることが多くなってきたが、社会及び学生のニーズを無視した改革では、公立私立を問わない大学間の競争に付いていけなくなる。現状を鑑みるに語学教育は間違いなく改革に急を要する項目の一つなのである。

本研究は、大学の語学教育について社会及び学生のニーズに応えるべくコミュニケーション能力の習得を第一義に考えた場合、いかなる語学教育が可能であるか考察したものである。一つは現在の一般的な大学の設備で可能なもの、即ちビデオ教材を使用した教授法であり、いま一つは近い将来の各大学に標準装備されるであろうコンピューターを使用するもの、具体的には音声入力ソフトを使用する教授法である。前者は有馬が徳島大学で実際に授業を行って学習効果と問題点及び学生の反応について明らかにした。後者は横山が非常勤先である西南学院大学の学生からデーターを集めたものである。共に中国語教育を対象とする。

2．ビデオ教材を使用した中国語教育

2.1　経緯

徳島大学の全学共通教育において中国語が外国語として開講されたのは平成5年度からである。筆者は平成6年度より一年間の中国語教育を受けた学生を対象とする中国語IIの授業を担当した。中国語IIでは筆者の従来の研究対象の一つである中国古典との関連から『説苑今注今釈』（台湾商務印書館）というテキストを講読の対象とした。「今注今釈」という中国古典の現代語訳を読み進めるに当たっては、現代中国語の力だけでなく中国古典に対する知識及び中国思想史についての理解が必要となる。筆者はこの講読を通じて学生に中国語の能力だけでなく、それ以外の教養をも同時に習得させることも目的としたのであ

る。どの国・地域の言語もそれが話される国・地域の文化・歴史とは不可分であり、言語そのものも文化であり歴史であるといっても過言ではない。したがって筆者はこれまで語学習得とは会話能力の習得のみならず、その言語に付随する文化や歴史といった背景も同時に理解しなければならないと認識していた。そこで『説苑今注今釈』という語学の教科書としては過去に例のないテキストを選んだのである。このテキストを見て学生は初回こそ驚いていたようであるが、講義を重ねるうちに筆者の考えも浸透し授業運営は一般的な中国語のテキストを使用するのと変わらず順調に行うことが出来た。また、講義中にテキスト内容の理解のために補助的に行った中国思想及び歴史の説明が予想以上に学生の興味を喚起し、この点においては当初の目的は達成することができた。しかしながら、一年の講義を終えて確かに学生は内容を理解することができるようになり、また中国の思想や歴史と言語の関連について教養を身につけることができたものの、肝心の会話の能力については、一部の学生を除いて目立った進歩は教師の実感として見ることが出来なかった。コミュニケーション能力を養成するという点において中国古典の訳注の講読という教授法は課題を残したのである。

そこで、中国語Ｉの担当教官が研修のため半年間不在となったため筆者が臨時に中国語Ｉを担当することとなった平成７年度の後期に、課題解決のための一つの試みを行った。

それは言語に付随する文化や歴史の理解という目的をとりあえず無視してコミュニケーション能力の習得のみを授業の目的とする授業を行うことである。中国語IIでは学生は一年間中国語を学習しており学生間の能力差がついていて、どのレベルからコミュニケーション能力の養成を開始して良いか判断が難しいという問題があった。中国語Ｉでは学生全員が初学者であり基礎から始めることができる。そこで筆者は具体的な教授法としてビデオ教材の利用を導入することにした。使用した教材は台湾の飛揚伝播公司発行の「小魔女時限専送」、邦題「魔女の宅急便」である。

2.2　教授法・教材の選択

コミュニケーション能力の習得を優先する教授法としては、近年コミュニカティブ・アプローチが盛んであり、筆者も基本的にこの教授法をベースに授業することが第一に念頭に浮かんだ。ただ、コミュニカティブ・アプローチを成立させるための状況（situation）設定－即ち、場（setting)、役割（role)、話題（topic)－を如何に学生に自然にかつ能動的に受け入れさせるかが問題とし

て生じた。確かにコミュニカティブ・アプローチを前提とした教科書は在って状況設定もなされているが、教科書の状況設定を受け入れるだけでは学生の自主性・積極性を引き出すことは困難であると考えた。そこで場・役割・話題の三つの状況設定がそろっていて、かつ学生が興味をもって受け入れることのできる教授法としてビデオ教材の利用を選択した。学生が各自で状況設定が可能なものに戯曲も選択肢の一つに考えられるのであるが、文章による状況設定では学生の想像力の差違によってクラス全体で共通の状況設定が成立しない可能性が在る。これに対してビデオ教材は視覚的に理解可能で容易にクラス全体で共通した状況設定が可能である。またビデオ教材の方が文字中心の戯曲よりは学生の興味を喚起するだろうということも考慮した。

それでは、ビデオ教材として具体的に何を使用するかであるが、当時、筆者の手元には日本の所謂アニメの中国語版ビデオが三本あった。先の「小魔女時限専送」と「風之谷」(飛揚伝播公司発行・邦題「風の谷のナウシカ」)、「紅猪」(新潮社有限公司発行・邦題「紅の豚」) である。いずれも宮崎俊氏の作品で日本では有名なアニメばかりであるが、いずれが教材として適しているかは別問題である。いずれを使用するか決めかねていたので、語学教師としての立場で今一度この三本のビデオを一通り目を通してみた。「風之谷」では、SF 調の作品に見られる特徴の一つである作品特有のタームが頻出し、語学教材には不適当であることが分かった。また「紅猪」は第一次世界大戦の地中海が舞台のアクション性に富んだ作品で会話部分も大人のしゃれた会話が中心であり、初学者には少し難解すぎると判断できた。一方、実際に使用した「小魔女時限専送」はいわばファンタジーで女の子が主人公である。したがって、会話も比較的容易なものが多く、しかも初学者が学ぶべき内容の日常会話(例えば、天気予報・旅行出発の準備・自己紹介・ホテルのフロントでの会話・パン屋での買い物・宿泊の交渉など)が多く含まれていた。以上の理由で三本のビデオ作品中、「小魔女時限専送」が中国語Ⅰの教材としては最適であると判断した。

2.3　授業運営

ビデオ教材を学生に見せる前に、作品の台本をテキストの代わりに配布し、授業の事前に中国語の発音と訳を調べてくることを予習として求めた。(図1) 勿論、まずビデオ教材を見ることから授業を始めるという方法もあるのだが、中国語Ⅰであることを考えてピンインになれることと中国語の辞書を引く練習も兼ねてあえて予習を要求した。授業ではまず学生に一回の授業で進む分量に相当する台本を発音させた。これはあくまで学生がピンインをローマ字に影響

されず発音しているか、声調をきちんと区別して発音しているか等をチェックすることを主眼としていて、個別に評価や指導はしなかった。また、発声練習の代わりでもあった。次にビデオ教材を見せるわけであるが、最初から中国語版を見せるのではなく、はじめは日本語版の「魔女の宅急便」を見せた。こうすることによって、学生は先に発音練習した範囲の中国語の内容を理解できる。つまり、予習段階で逐語的に意味をとっていた学生はここでストーリーとして内容を自分で理解することになる。教師が説明して受動的に内容を理解するのではなく、学生が自分の耳と目から情報を入れ台本と比較・対照することによって理解することになるのである。受動的理解ではなく能動的理解である。能動的理解が出来た上で、次に同じ箇所の中国語版のビデオを二回から三回連続で見せた。この時、学生の頭の中では、日本語版のビデオを見て理解した内容を基本にして最初に読んだ台本の台詞とビデオから聞こえてくる中国語の発音を結びつける作業が行われる。つまり聞こえた音声（中国語）がどのような文字（漢字）であり、その固まりがどのような内容を伝達するのか理解されるのである。以上の過程を経て次に学生に見たビデオのなかではっきり聞き取れた場面、よく聞き取れなかった場面、印象に残った場面、自分が実際に話したい場面等について意見を求めた。多くの学生が聞き取りにくかった場面については再度、音読、日本語版ビデオを見る、中国語版ビデオを見るという過程を繰り返したが、それ以外では、場面を学生に自主的に選択させ、演じたい登場人物を選ばせその場面を再現させた。その際、たとえ台本と多少語順や語彙が異なっていてもコミュニケーションとして成立するレベルならば－極端な話、発音が多少おかしくても－注意・指導は行わなかった。そして次に学生を４、５人ずつのグループに分け、各グループで場面を選択し役割を決めて場面を再現させた。その際、必ず一人はグループ全体をチェックする役割を担わせ、一場面ごとに再現したコミュニケーションが台本とどのように違ったか或いは誰がどの語の発音が不正確であるかをチェックさせた。チェック役を交代でおくことで場面を演じる時はいい加減には出来なくなり、チェック役の時は声質の異なる中国語を真剣に聞くことになる。このグループでの場面の再現の時は教室は多少うるさくなったが、本来語学の授業は学生が声をだしてこそ意味があると考える。

図1　予習プリント

小魔女限时专送

1

琪琪：积积、就决定今晚出发了。妈妈、呃、欢迎光临。

（　　）

（　　）

妈、您听今天的气象报告没有。今天晚上是晴朗的满月之夜喔。

（　　）

（　　）

妈妈：琪琪、你又偷用爸爸的收音机了。对不对呀。

（　　）

（　　）

琪琪：没有关系啦。啊、多拉婆婆你好。我决定了今天晚上就出发。

（　　）

（　　）

妈妈：奇怪了。你不是说好要再等一个月的吗？

（　　）

（　　）

琪琪：下个的满月、也不知道会不会是晴天。我想在晴天里出发嘛。

（　　）

（　　）

妈妈：砒・・・琪琪・・・等一下等一下・・・。

（　　）

（　　）

婆婆：怎么、出发呀、是关于魔女修行的事啊？

（　　）

（　　）

妈妈：是啊。就是这种传统啊。想当魔女的孩子到了１３岁要离开家庭独居的。

（　　）

（　　）

婆婆：时间过得真快啊。小琪琪呀、都已经到了这个年龄了耶。

（　　）

（　　）

2.4　学生による評価

筆者が行ったビデオ教材を利用した授業は以上のごとくであるが、これについての学生の反応について報告したい。学期終了後に学生にビデオ教材についてのアンケートを行った。(図２) 17名 (男７名、女10名) の学生から回答があった。

図２　ビデオ語学教材についてのアンケート

性別　男・女　　学年1234　その他

Ｑ１　あなたは大学入学以前にビデオ教材を使用した語学の授業を受けたことがありましたか？

１　あった　　２なかった

Ｑ２　Ｑ１で「あった」と答えた人のみお答えください。それはどんなビデオ教材でしたか？

１教科書に準じたサブ教材　２教科書とは別の語学用教材
３市販の外国語のビデオ　４教師が制作したオリジナルビデオ
５その他（　　）

Ｑ３　前期の授業について、このようなアニメのビデオを教材として使用することについてあなたはどう思いましたか？

Ｑ４　ビデオ教材を使用した語学の授業は授業のあり方として好ましいと考えますか？

１とてもよい　２まあまあよい　３ふつう　４あまりよくない
５まったくよくない

Ｑ５　ビデオ教材を使用する語学の授業で一番身に付く能力はどんな能力だと思いますか？

１ヒアリング力　２スピーキング力　３表現力　４読解力
５その他

Ｑ６　Ｑ５でそう答えた理由を簡単に述べてください。

Ｑ７　Ｑ５で答えた能力はあなたが身につけたい能力ですか？

１必ず身につけたい能力である
２どちらかといえば身につけたい能力である
３ふつう
４あまり身につけなくてもよい能力である
５全く身につけなくてもよい能力である

Ｑ８　あなたが大学の語学の授業で身につけたい能力はどんな能力ですか？簡単に述べてください。

Ｑ９　前期のこの授業であなたが望んだ能力は身に付きましたか？

１とても身に付いた　２まあまあ身に付いた　３ふつう
４あまり身に付かなかった　５まったく身に付かなかった

Ｑ10　Ｑ９でそう答えた理由を簡単に述べてください。

まず、これまでビデオ教材を利用した語学の授業を受けたことがあるかについては、ある・6名　ない・11名で、やはり受けたことのない学生が多数を占めた。また見たビデオも教科書の内容理解を補助するためのサブ教材が多く、高校の英語の授業は教科書偏重で行われていたことが分かる。(図3)

図3　Q2の回答：大学入学以前に授業を受けたことのあるビデオ教材について

教科書に準じたサブ教材	4名
市販の外国語のビデオ	1名
教師の作成したオリジナルビデオ	1名

今回、教材としてアニメ作品を選んだことについては半数以上の学生が、授業が楽しくなった・とりつき易くなったと答え概ね好評であった。(図4) また辞書では分からない言葉のニュアンスが理解できた、実際にどのように使うか理解できたという肯定的な意見が多かった。否定的な意見はアニメは好きではないという意見が1名あっただけである。さらにアニメビデオを教材にしたコミュニカティブ・アプローチを主とした今回の教授法については、とても良い・11名　まあまあ良い・6名と17名全員が満足したという結果がでた。しかしながら、満足度とは異なって授業の目的・ねらいがどのくらい達成されたかを見てみると、当初の筆者の思惑に反する回答が多くみられた。即ち、コミュニケーション能力、簡単に言えば中国語を話せて聞ける能力の習得を今回の授業の主目的に据えていたのに対して、学生がこの授業が実際に有効であると判断したのは、ヒヤリング力・10名　表現力(状況に応じた表現ができる力)5名　読解力2名　であって、聞く力の習得に偏ってしまった。大学の語学の授業で身につけたい能力を質問した回答では、スピーキング力5名　総合的な日常会話力5名　という回答が上位を占めていて聞く能力もさることながら学生はやはり話す力の習得を欲していることが分かった。筆者としてはビデオを見せた後の学生同士のグループ学習で話す能力の養成に十分配慮したつもりではあったが、それ以上にグループ学習以前のビデオを見て中国語を聞き取り理解するのに学生が多大な学習エネルギーを消費していたのであろう。それが、学生の実感としてヒヤリング力は身に付いたが、已然としてスピーキング力の養成を欲するという結果になって現れたと言える。

図4　Q3の回答：アニメを語学教材として使用することについて

授業が楽しい・とりつきやすい	11名
生きた言葉が学べてよい	4名
言葉の使い方がわかりやすい	2名

2.5　ビデオ教材使用の利点と欠点

前述した学生のアンケートの回答結果からわかるように、今回の実験は以下の点については成功であった。即ち、

1．人気のある日本のアニメを教材としたことで、ほとんどの学生が興味をもって授業に取り組むことができた。また授業の後も学生同士の話題として取り上げられることも多く中国語の授業を教室外でも学生に意識させることが出来た。さらに無機的な教科書よりも生きた中国語を学んだという実感を学生に与えることが出来た。

2．同じビデオを日本語と中国語で聴いて対照させたことで学習した中国語をどのような場面で使えばよいのか容易に理解させることが出来た。また事前に中国語の台本を予習させたことと、初心者用に会話のスピードが加減されて作られた教材ではないことを学生に周知させたことによって学生の集中力を高めることができ、ヒヤリング力習得の達成感を高めることができた。

3．ビデオを見た後の学習内容としてビデオ中の場面を学生に選択させたが、この学習内容の選択の自由によって学生が自分の聞き取れた場面を選択することが出来たため、中国語に対する劣等感を学生に抱かせることなく授業を進めることが出来た。

一方、当初の予想に反して解決しなければならない問題としては、以下のような点が指摘できる。

1．学生がヒヤリングで疲労してしまい、授業後半の会話練習では集中できないことが多く、したがってヒヤリング力の向上に比べてスピーキング力は向上しなかった。

2．会話練習はコミュニカティブ・アプローチによる学生同士のグループ学習を中心としたが、他人の話す中国語が正確であるかどうか学生によっては判断できないケースがあり学習が途中で中断することがあった。

3．本来教材ではないビデオなので学生に配布した台本中には難解な表現が含まれており、それらは授業の性格から保留にして授業を進めたが、全てを理解しないと落ちつかず先に進めない学生が見られた。またごく少数で

あるがアニメを教材としたことに適応できない学生も見られた。

問題点はおおむね以上であるが、利点及び欠点を整理してみると、ヒアリング力の養成には著しい効果があるが、スピーキング力の養成については残念ではあるが再考の余地があるということである。具体的には、進度は遅くなるが、ヒアリングの練習とスピーキングの練習を1時間ではなく2時間で行うようにするとか、会話の練習中に教師一人ではカバーできない部分をTAという資格でネイティブに補助してもらうとかいう方法をとればスピーキングについてもかなりの効果が得られるはずである。

また、アニメのビデオ教材を使用することによって学生が授業に積極的に参加するようになったのは事実である。したがって、既存の教科書の補助的なビデオ教材ではなく今回使用したようなビデオ作品をもとにした教材作成も大学で語学を教える教師のこれから積極的に取り組まなければならない仕事であるといえる。

3．語学教育に於ける音声入力ソフトの可能性

3.1　CAIについて

近年、教育界で注目をあつめているタームの一つにCAIがある。正しくはComputer Assisted Instructionと言い、直訳すると「コンピューターに支援された教育」である。実際にはコンピューターによる教育支援に関するシステム及びその方法論、構成原理、現実方法などを意味するタームとして用いられる。このタームは今後、教育の現場にコンピューターが導入されるにしたがって一般的になっていくことが予想される。例えば、中国語教育に関してもすでに「日本中国語CAI研究会」(会長　林要三　帝塚山大学教授)があって、コンピューターを利用した中国語の教授法及び学習法についての研究や教材開発などを行い、定期的に研究発表会を行っている。理工系の研究会ではすでに日常であっても文科系ではまだ定着していないメーリングリストを活用した意見交換を行い、さらに研究の成果をホームページ上で公開している(1)。これは文科系の研究者の間でコンピューターの利用が一般的になってきたことを如実に示す事例でもあり、今後もこの傾向はますます強くなっていくと思われる。また、研究者だけでなく学校教育の現場にコンピューターが導入されるのは確実であり、そのハードの有効利用の一つの手段として今後CAI研究は活発になっていく研

(1) http://tusparc02.tezukayama-u.ac.jp

究分野である。そこで、今回その一環として中国語教育における音声入力ソフトの可能性について考察を行った。

3.2　学ぶ側の意識

近年の大学教育は社会及び学生のニーズに積極的に応えていく必要があり、なかでも語学教育は急を要する分野の一つである。そこで、筆者が出講している西南学院大学の平成9年度新入学生に授業の初回でCAIについて意識調査を行った。（図5）対象の学生は2クラス計88名である。

図5　語学の授業とコンピューターについてのアンケート

性別　♂・♀　　学年　1　2　3　4　その他

Q1　あなたが受けてきた中学・高校の英語の授業であなたは会話の能力が身に付きましたか？

1とても身に付いた　2まあまあ身に付いた　3ふつう
4あまり身に付かなかった　5まったく身に付かなかった

Q2　Q1でそう答えた理由を簡単に述べてください。

Q3　大学一年で初めて学習する外国語について、授業では何を期待しますか？

Q4　あなたが中国語を選択した理由は何ですか？

Q5　あなたはコンピューターに興味・関心がありますか？

1とてもある　2まあまあある　3ふつう　4あまり無い
5まったくない

Q6　Q5でそう答えた理由を簡単に述べてください。

Q7　あなたはインターネットに興味・関心がありますか？

1とてもある　2まあまあある　3ふつう　4あまり無い
5まったくない・インターネットを知らない

Q8　あなたはコンピューターを使った語学の授業に授業を受ける立場として興味・関心がありますか？

1とてもある　2まあまあある　3ふつう　4あまり無い
5まったくない

Q9　Q8でそう答えた理由を簡単に述べてください。

Q10　外国語学習においてコミュニケーション能力を身につける時、あなた自身では何が阻害（マイナス作用）要因となっていると考えられますか。

まず、単刀直入にコンピューターを使用した語学教育に対する興味の有無については、実に「とてもある」と答えた3割の学生を含め8割を超える学生が「ある」と答えた。(図6) これはただ単にコンピューターやインターネットに興味があると答えた学生の数を上回っていて(図7)、この結果からコンピューターに興味を持っている学生のみならず、コンピューター自体には興味を持たない学生もCAIには興味を持っていることが窺える。まさにCAIは学生のニーズに合致するものであると言える。

図6　あなたはコンピューターを使った語学の授業に興味がありますか？

とてもある	31%
まあまあある	53%
ふつう	9%
あまり無い	5%
まったくない	2%

図7　コンピューター及びインターネットに興味のある学生の割合

コンピューターに興味がある	72%
インターネットに興味がある	66%

次に今一つ語学教師が念頭において置かねばならぬアンケート結果がある。それは「大学で初めて学習する外国語の授業に何を期待するか」を質問したものであるが、結果は日常会話レベル、或いはそれ以上のレベルを含めて88人中50人の学生が「会話の能力の習得」を欲していると答えている。(図8) したがって、「外国語を話せるようになりたい」という学生のニーズは、語学教育においてCAIを推進する上でまず教師が基本としなければならない学習目標であると言える。

図8　大学で初めて学習する外国語の授業に何を期待するか

日常会話レベルの会話能力の習得	32名
日常会話レベル以上の会話能力の習得	18名
楽しさ	9名
文法・発音などの基本事項	5名
異文化に対する興味の喚起と理解	4名

アンケート結果から分かるように、「CAIは学生のニーズにあっており、学生はCAIを受け入れる状態にある」ことと「学生の望む授業は会話の能力が習得できる授業である」という2点を踏まえて、次に現状で考えられるCAIのモデルケースについて言及したい。

3.3　CAIのモデルケース

現時点で中国語CAI、即ちコンピューターを利用した中国語教育は、以下の3つのモデルが考えられる。

1．市販の語学教材ソフトの活用
2．インターネットの活用
3．音声入力ソフトの応用

以上の3つについて個別に検討する。まず、市販の語学教材ソフトであるが、現在英語教育には及ばないものの中国語教育関係でも国内外で様々なソフトがある。そしてそれぞれが音声や動画を組み込んで趣向を凝らしているが、基本的にはソフトの操作によって中国語の発音や日本語の意味が聞けるというものである。テープ等と違いデジタルであるので学習者がストレスなく何度も繰り返し聞けるというメリットがある。しかしながら、これではヒヤリングの練習には有効であるが、聴いて練習するだけであればテープやビデオでも代用可能であり、コンピューターをことさらに利用する意味はない。さらに欠点として、実は市販のソフトの最大の欠点といえるのだが、学習者が話した中国語、或いは発した中国語の発音が実際に通用するのか、正確なのかを学習者が自分で判断及び確認できないという点が指摘できる。学習者が求めている日常会話の能力とは、つきつめると「相手の話したことがわかる」という能力と「自分の話したことが相手に通じる」ということである。市販のソフトではヒヤリングの確認は出来ても通じたかどうかの判断が学習者自身で出来ないという点で会話能力習得には決定的に不十分と言える。また、市販のソフトは完成度が高いだけに個々の教師がそれぞれの生徒の学習状況に合わせて臨機応変に学習内容を変更できないという制約もある。

それでは、インターネットの活用について見てみると、ホームページやニュースグループは中国の文化及び現状を理解する上での有効な情報源ではあるが、語学の授業での直接的活用ということに限定すると、一つは電子メールを利用した作文の授業、今一つはビデオ会議システムを利用した授業が考えられる。しかしながら、電子メールでは日中混在のメールは所謂文字化けの問題があり、なにより電子メールは直接的には作文の授業であり初学者にとって直接的に会

話の能力を養成することに有効ではない(2)。ビデオ会議システムは直接ネイティブと会話できるというメリットがあり、会話の能力を養成するにはCAIとしては有効な手段であるが、残念ながら現状ではまだ技術的設備的な面で一般的に利用するレベルには達していない。したがって、現状では会話の能力養成に限って言えばインターネットの活用は時期尚早と思われる。

では、音声入力ソフトの応用であるが、「活用」ではなく「応用」とした理由は、このソフトが本来日本人の中国語学習用に開発されたソフトではないからである。本来、この音声入力ソフトは中国人のワープロ用に開発されたソフトである。では、このソフトをどのように応用するのか、また語学教育においてどのようなメリットがあるのか、次章で述べてみたい。

3.4　Chinese Dictation Kit（CDK）の応用

筆者が現時点で研究対象としている音声入力ソフトは具体的には1994年にApple Computerから発売された「Chinese Dictation Kit」（以下、CDK）である。先述したように本来は中国語を母国語とする者がワープロとして使用する。このソフトはあらかじめ音声をコンピューターに登録しておけば、利用者はこのソフトを起動してコンピューターに向かって中国語を発すると、その発音をコンピューターが認識して文字に変換して、ちょうどキーボードから中国語を打つのと同じように文章を書くことができるのである。

では、このCDKがどのような点でコミュニケーション能力の習得を第一とする中国語教育に有効であるかと言えば、次の4点が挙げられる。

1　学習者が自分の中国語が正しいか否か自分で確認できる。
2　間違っても恥ずかしくない
3　授業時間の節約ができる
4　学習内容を教師が自由にアレンジできる

順を追って詳しく見ていくと、まず、第1点であるが、このソフトを使用してコンピューターのモニター上に中国語が正しく変換されるということは、それは学習者の発した中国語がネイティブスピーカーに正しく理解される、即ち「通じる」ということを意味する。通じることを第一に考えると流暢さ等の問題は二次的な問題である。中国語を初めて学習する学習者がとにかく自分の発した中国語が通じるか否かを自分で判断できることの学習効果は極めて大きいと考

(2) その他、文字で会話する所謂チャットがあるが、これの語学教育における可能性はメールより大きいと考えられる。

えられる。また、教師或いはネイティブスピーカーがいなければ判断できなかったことが自分で可能であれば、教室外での独学も可能であり、家庭学習の効率向上も見込まれる。第2点は、学生のアンケートでも語学が上達しない第一の要素として間違うことの恥ずかしさが挙げられている。(図9) CDKはコンピューターソフトなので教師に間違いを指摘されることで感じるような恥ずかしさを学習者は感じることなく正しい発音ができるまで繰り返し学習できる。語学の初期段階において繰り返し学習に恥ずかしさという抵抗を感じないで済むことは大変なメリットと思われる。第3点、第4点は学習者ではなく教える教師にとってのCDKを使用するメリットである。第3点は、CDKを使用すると学生が自分で自分の発音をチェックできるので、教師が一人一人の発音をチェックしていた時間が大幅に短縮できる。また、授業中に発音指導を教師から受けている学生以外は実質授業に参加していない時間になるというロス時間が解消される。第4点は、CDKは基本的にワープロソフトであるので、最初から学習内容が決められている市販の語学教材とは異なり、教師が学生に練習させたい文章を決定して学生に練習させることができる。つまり、教師はあらかじめ決められた学習内容を無理して学生に消化させるのではなく学習進度、学生のニーズ、教室の雰囲気等さまざまな学習状況に応じて臨機応変に決定できるのである。

図9　コミュニケーション能力習得上のマイナス要因

間違うことの恥ずかしさ	19名
ネイティブと話す機会がすくない	12名
積極性の欠如	10名
練習不足	9名
語彙力・知識不足	8名

以上の4点がCDKの利用で考えられる学習メリットである。特に、第一点の学習者が自分の発した中国語が通じるか否かを自分で判断できることのメリットは、いわばバーチャルなネイティブスピーカーを常時傍らに置くことに等しいため、教室の内外を問わず極めて大きな学習効果をもたらすものである。

3.5　CDK応用の問題点と将来の展望

CDKを応用したコミュニケーション能力習得方法の利点は前節で述べたごとくであるが、現時点では授業への導入にいくつか解決すべき問題点がある。

一つはCDKはインストールが終了後に使用者が音声をコンピューターに登録しなければならないが、その分量はおよそ千文字にも及び、ネイティブスピーカーでさえ登録に3時間は必要であり、初学者では丸一日は必要である。さらに登録段階で正しい発音をコンピューターに登録しておくことが語学の授業で使用するにあたっての絶対条件であるので、学生が登録する際には教師もしくはネイティブスピーカーがマンツゥマンで指導する必要がある。丸一日の時間と指導体制の整備が解決されなければならない。また現時点でCDKは正しい発音で登録し、且つ正しく発音したにも関わらず正しく変換されないという現象がまま見られる。特に摩擦音が正しく変換されない傾向がある。これでは、学生をかえって混乱させることにもなりかねない。そして、言うまでもなくCDKを大学の授業で使用しようとする場合当然ながら一人一台あるいは二人で一台の割合でコンピューターが利用できる環境が必要である。

以上がCDKを利用した授業を行うに当たっての今後の課題となる問題点であるが、いずれも解決不可能な問題ではない。初期段階における音声登録の煩雑さの問題は、たとえば中国から来ている中国人留学生をTAとして雇用すれば解決する。またヒット率の向上に関しては現在のCDKはバージョン1であるのでバージョンが上がるにつれて解決すると思われる。さらに現状から考えて大学へのコンピューター導入はこれから推進されることはあっても後退することはなかろう。以上のように見てみると、現時点では確かに問題点も指摘できるが、現時点からでもCDKを利用した中国語教育は導入してよい、むしろメリットを考慮すると積極的に推進してノウハウを蓄積して行き授業環境がすべて整ったときの本格的導入に備えるべきであると思われる。

4　まとめ

新しい中国語教育について有馬がビデオ教材を使用した中国語教育について、横山が音声入力ソフトの可能性について考察した。研究内容は異なるが両者ともに大学における語学教育は社会及び学生のニーズに応えなければならない、即ちコミュニケーション能力が習得できなければならないという立場で一致している。今回は偶然両者ともに中国語教育に従事していて中国語教育を対象として論を進めたが、本稿の成果は全ての語学教育に普遍的に応用が可能である。各外国語教育に携わる各教師に何らかの参考となることを期待したい。

よこやまゆたか（九州大学文学部助手）
ありまたくや　（徳島大学総合科学部助教授）